

明倫短期大学研究会講演抄録

第39回：4月13日（木）

やさしい心理学講座第3回 ＜心＞について考える

山田 隆文 助教授（歯科衛生士学科）

欧米では歯や歯茎の健康も自分で守るというのが当たり前になりつつある。患者さんの気持ちと口腔環境への関心の変化を考えながら、医療従事者も、歯科医師が主体の指導的立場から、疑問を解決するコンサルテーション、患者さんが主体のカウンセリング的な立場へと、柔軟にシフトして行かなくてはならない。感情とその変化の問題に触れながら、これらの相違点と注意点や、具体的なテクニックなどについて解説をした。

第40回：4月27日（木）

最近の歯周病学— 歯周組織再生とエムドゲイン

福島 祥紘 教授（歯科衛生士学科）

新しい歯周組織再生法としてエナメルマトリックス蛋白が注目を集めている。これはスウェーデンのHammarstromらによって研究されているが、上皮性のエナメルマトリックス蛋白(商品名：エムドゲイン)が間葉性の原生セメント質を誘導するばかりでなく、実験的に歯根膜線維や歯槽骨までも誘導する事が判った。この事実を利用して、新しい歯周組織再生法の手術術式が考案されている。その詳細を述べた。

第41回：5月25日（木）

マネキンによる顎口腔機能 教育・学習システム 下顎運動のできるマネキンの製作

藤口 武 助教授（歯科技工士学科）

今回我々は、学生に対し顎口腔機能学をより正しく理解させるために下顎運動が直接、観察ならびに描記できるマネキンと、咬合診断学の実習ができるマネキンの製作を行い、その結果について報告した。本マネキンは、生体と同じような下顎運動を行わせるためにはマネキンの下顎をどのように動かせばよいのか、そのとき、顎頭はどのような位置でどのような動きをするのかなど、術者が直接目で観察しながら操作でき、かつ、描記された軌跡と組み合わせることによって下顎運動をより理解することが出来る点にこのマネキン

の利点があると考えている。

セラモメタルブリッジにおける 人工歯冠の独立感に関する一考察

五十嵐 雅子 講師（歯科技工士学科）

近年、前歯部補綴に対する審美的評価が一段と強調されるようになってきたため、歯科臨床においてはセラモメタルブリッジの適応となる症例が多くなってきた。ここで歯科技工の点で問題となるのは、連結したものに独立感を求めるという矛盾した要求である。そこでセラモメタルブリッジの各人工歯冠それぞれに独立感を表現するという課題を立体幾何学的に捉え、歯科技工の教育にも適応できる合理的な陶材の形態修整法について述べた。

第42回：6月8日（木）

老化体細胞からのクローン動物に おける末端小粒（テロメア）長と 細胞倍加回数の延長

(Lanza R. P, et al. :SCIENCE, vol. 288,
pp. 665~668, April 2000)

小黒 章 教授（歯科衛生士学科）

クローニングの可能性（将来性）は、技術が、如何に、老化する細胞の若返えりと体細胞の若さを表現型的に回復することができるかによる部分がある。ここに、我々は老化した体細胞集団をドナーとする6頭の健康なクローン仔牛の誕生を報告する。核移植が老化細胞（0から4細胞倍加余命）の複製余命を90回以上に延長した。クローン動物（仔牛）細胞のEarly population doubling level complementary DNA-1 (EPC-1、加齢依存遺伝子)発現は年齢対照（5から10月齢）の細胞の3.5から5倍であった。サザンブロットとフローサイトメトリーではテロメア長が年齢対照動物を越え、新生仔（<2週齢）より延長していた。細胞と動物個体を再生することができるようになったということは医学と哺乳類の老化研究に重要な意味がある。